

明治初期を中心とした福島縣の水路交通 (一)

安田初雄

一、船路 (舟)

阿武隈川・阿賀川及其等の支流は猪苗代湖と共に明治初期に於ける福島縣内の主要な水上交通路であつた。外に鮫川下流も利用されたかも知れぬが、未だ決定的な資料は見えてゐない。

(1) 阿武隈川 川口の宮城縣荒濱から角田盆地の丸森までが第一區、丸森から阿武隈高原を横切つて福島盆地の福島までが第二區、以上を合はせて下流部船路とし、順次に下川船區、上川船區とする。此の可航限界點は福島である。福島南部伏拜フシオガキ附近からは、二本松の東部まで川身は阿武隈高原に陥入し、蓬來岩・稚兒舞臺附近の急湍深淵を造つて二十數軒の間不可航區をなして

ゐる。上流部船路は二本松東方の太平村ナギノ供中から須賀川町北の中宿まで、更に中宿から現在の西白河郡三神村ミヨウシン明新—當時の明岡村と新田村とを合併したもの、川港は明岡にあつた。—までの二區に分けられる。明岡の南は川床に岩石が亂立してゐること、川身が略等水量の二川に分れてゐる爲に水量急減すること等の爲めに明岡が可航水路限界點をなしてゐた。もつとも更に上流でも筏流しには利用された。此の上流部船路中須賀川中宿から明岡までの間には乙字瀧があり、遡航は容易でなかつたが、左岸に近く巾三尺ばかりの堀り割を造つて船を曳き上げる等の特別な勞作が必要であつた。又供中、須賀川中宿

ぬと云つてゐたが、平潟では鮫川を上田川と云ふと聽取した。(昭和十年八月の巡檢に際して)

(4)猪苗代湖 深度が充分あるから船着場さへあれば如何なる方向にでも航行出來たが、湖脚翁澤から壺楊・山濁・濱路・舟津等へ通ずる航路が主要なものだつたらしい。

第一表 下川船區の川港

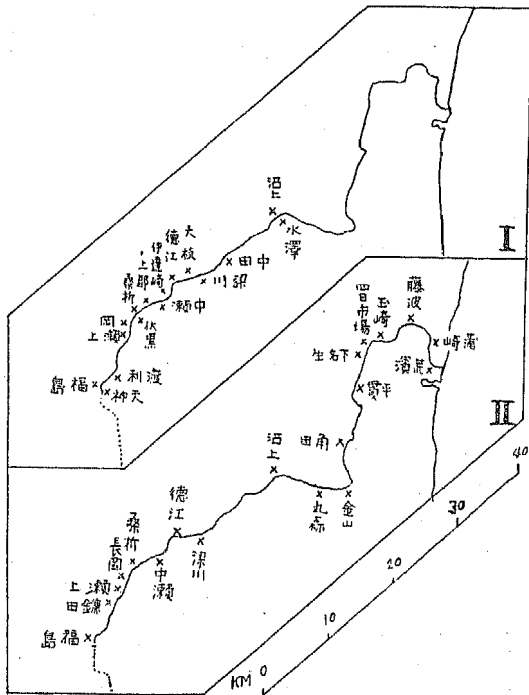
(明治十四年)

港名	現在位置
荒濱	宮城縣亶理郡荒濱村
蒲崎	〃 名取郡玉浦村
藤波	〃 岩沼町
玉崎	〃 千賀村
四日市場	柴田郡榎木町
下名生	〃 船岡村
平貫	伊具郡東根村
角田	〃 角田町
金山	〃 金山町
丸森	〃 丸森

註 金山を原町臺町とも云つた。

第二圖 阿隈限下川部の港川

I 寛文年間河村瑞軒の圖に依る
II 明治十四年



二、港

川港・湖港も時代に依り、名・位置・數等に變化を來たした。

(1)阿隈限川 下川船區(第一表參照) 荒濱は荻濱・石巻・平潟等と併んで東北日本太平洋沿岸の重要港であつた。阿隈限河谷北部を主な後脊地

としてゐた。千石積の親船が入港し、江戸深川への回漕米を此處で検査して、それに積みかへた。間屋も數戸あり阿武隈川港として最も繁盛

第二表 上川船區の川港

(明治十四年)		(寛文年間)		現在位置	水澤・沼上河岸 よりの川路距離
港名	全上	全上	全上		
沼上	水澤河岸	宮城縣伊具郡丸森町小倉の西方	一	二	二
沼上	沼上河岸	大張村後澤附近	一	三	二
梁川	中田河岸	福島縣伊達郡富野村舟生附近	一	二	二
梁川	梁川河岸	梁川町	一	三	二
徳江	大枝河岸	大枝村	一	六	二
徳江	徳江河岸	森江野村徳江	一	八	二
中瀬	伊達崎河岸	伊達崎村道林	一	〇	二
中瀬	中瀬河岸	保原町中瀬	二	二	二
桑折	上郡河岸	伊達崎村沖	二	四	二
桑折	桑折河岸	桑折町南部	二	六	二
長岡	伏黒河岸	伏黒村	三	〇	二
長岡	岡河岸	長岡村長岡	三	二	二
鎌田	瀬上河岸	信夫郡瀬上町船場町	三	四	二
鎌田	渡利河岸	鎌田村舟戸	三	六	二
福島	福島河岸	福島市御藏町	三	六	二
福島	天神河岸	信夫郡渡利村	三	六	二

したものである。丸森は下川船區の限界で、諸貨物の積みかへ港である。

(2) 上川船區(第二表参照) (註二)

註一 明治十四年十一月 回漕店集會

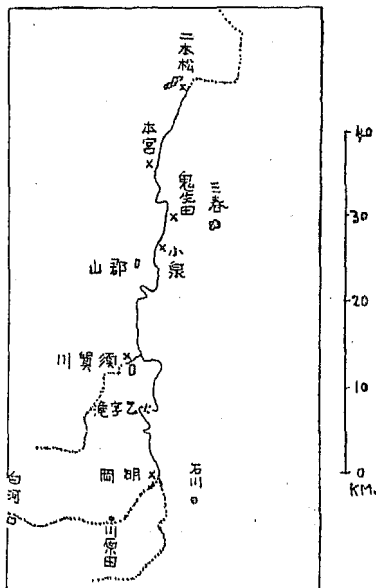
決議 運賃表

註二 寛文年間の川港は福島圖書館藏書、川村瑞軒原圖寫に依る。

註三 近頃の出版物で福島の川港を舟場町とせるものが御藏町が主であつたことは古老の言によつても知れるし、明治二十年日本鐵道會社福島驛設置に付き新市街開殖圖」と云ふ扇面に畫かれた地圖に依ると御藏町に回漕荷物取扱所あり、舟場町にも荷物取扱所としてあるが貨物の大倉庫は御藏町にあつた。例の瑞軒の圖に依ると其處には大佛城の南に家中宅があり御城米御藏、上總屋三吉船會所、上杉彈正大彌藏と順次南に並んで川に而してゐた。

明治初期を中心とした福島縣内の水路交通

(3) 上流部船路(第三表參照) 阿武隈川上流部の港



第三表 上流部船路の川港 (明治十年前?)

港名	現在位置	供中よりの川路距離
二本松	福島縣安達郡吾下村成川(黒塚附近)	一〇、五籽
本宮	本宮町	一九、〇籽
鬼生田	山部郡逢隈村	二三、五籽
小泉	水泉村	四五、〇籽
須賀川	岩瀬郡須賀町中宿	六二、〇籽
明河	西白河郡三神村明新	

註一 該表は運漕事務に關係した人、その他現地の古老により、船問屋の所在等も確め得たものを此處にかゝげた。鬼生田は三春の外港であつた。

註二 明治十三年福島縣統計 遭運斷立所所在地には須賀川本宮、二本松の三ヶ所だけ擧げてある。

(4) 阿賀川及其の支流等(第四表參照)

港名	現在位置	川口よりの川路距離
清水河岸	福島縣耶麻郡鹽川町(大鹽川)	一三五籽
堀切北河岸	堂島村會知(阿賀川)	一三一籽
山崎前河岸	應徳村山科()	一二七籽
柴崎河岸	新郷村豊洲()	九〇籽
德澤河岸	河沼郡群岡村德澤()	八四籽
坂ノ下河岸	笈川村濱崎(日橋川)	一三五籽
大船戸・新港戸	新潟縣東蒲原郡津川町(阿賀川)	五八籽
小松河岸	下條村小石取()	三六籽

註一 該表は明治十三年福島縣統計に依る。

註二 明治二十一年福島縣統計に依る、耶麻郡駒形村金橋(日橋川)、全郡山科村(阿賀川)、河沼郡坂下町(鶴沼川)等も川港であつた。

田八隻、原町臺町二十四隻、丸森百二十八隻、沼上十隻、五十澤六隻、梁川六隻、福島八隻（外三隻は客船）あり等と云ふものが有るが、その時期・數の正否は未詳である。然し港勢の比較には概略利用出来る。

これ等の船は總べて貨物船である。

註一 宮下喜佐治 瀬上郷土教本 一四頁

註二 上流部船路の船頭だつた老翁の語に依る。

註三 長井政太郎 最上川の水運及び輸送物資に就きて。

地理學評論六ノ一〇 三三頁

註四 阿武隈川上川船區では船頭一人、舟子二人が乗組員で

船頭は船中に残り梶をとつた。全川上流部では船頭一人舟子一人であつた。此の相異は後に記述す。阿賀川では五人位乗組んでゐたと云ふ。三、四人かかりで曳き上げたのである。

註五 明治十二年福島縣統計、明治十三年福島縣統計 此の

外の縣統計には河岸別船數の記載なし。

（未完）

新著紹介

○歐亞點描 下田將美著 一元社發行 定價二圓八十錢

著者下田氏は大阪毎日の經濟部長として有名な方であるが昭和九年の春から夏にかけて歐亞各地を巡遊され、比律賓・セレベス・ジャバ・印度からイラク・シリアをへて土耳其に入り、バルカン諸邦を訪問して歐洲に出たところの世界新市場視察團の東道をされたときの土産話である。勿論本書はさうした經濟事情の研究を専門的に書いたのではなく、東邦の遊士がいかにかその遍歴した所に旅愁を感じたかといふ一篇の美文讀本である。従つて地理書ではないけれども、かうした感慨にみちた旅行記は筆者まだ嘗て讀んだことがない。セイロンにしても、ペルシャ灣にしてもイラクの沙漠の旅にしても、トルコでの追憶にしても、巻中いづこをみても、全くフレッシュな感じで珍らしく、さうして深く考へさせらるゝ地誌であるとの感にうたれる。集むる所は、夕闇のバルカン、古都バグダット、コロンボのフェルナンド君、賭博のジャワ、A老人の家庭、白と赤、マニラの牢獄、珍魚デオロギー、苦熱のペルシャ灣、シリア沙漠を横切る、土耳其雜信、沈黙の塔ナチス清黨事件直後の柏林、シヤガタラ文の舊港、世界的二選手を偲ぶ、鰐を喰ふ、三百年前の日本地圖、ダマスクへ、密輸入物語、窮極を思ふ。といふ二十篇、いづれもアトラク